医学史と社会の対話
オンライン
2020 Part II
セミナー

感染症史研究の最前線から

医学史研究者と考える

このオンラインセミナーでは、感染症の歴史研究の最前線に立つ３人の研究者を講師に迎え、
それぞれの研究のとりくみの中から、最新の知見をお話しいただきます。
このセミナーの対象は、メディカル・ヒューマニティーズ（医療の人文社会学）の
研究者・大学院生レベルを想定していますが、関心のある方には広くご参加いただけます。

［形　　式］

Web会議サービスZoomを用いた
オンラインセミナー（事前申込制）
※録音・録画等はご遠慮ください。

［申込方法］

ウェブサイト「医学史と社会の対話」
（https://igakushitosyakai.jp/）の
申込フォームよりお申し込みください。

10月10日 ㊏ 16:00-18:00

山本太郎 長崎大学熱帯医学研究所教授

「**感染症対策の転換点**：ヒトは一人では生きていけない」

病原体を特定し、それに対する対処法を考えてきた近代細菌学は今転換点を迎えようとしている。微生物との共生、その攪乱がもたらすもの、そうした微生物の不在は、私たちに大きな影響を与えようとしている。「ヒトは一人では生きていけない」――ヒト常在菌を含めて、そんな話をしてみたいと思います。

※ この回のみ時間帯が異なります。

11月14日 ㊏ 14:00-16:00

飯島渉 青山学院大学文学部教授

「**感染症対策における**
コミュニティ・コントロールの位相」

新型コロナウイルス感染症への対策として、中国では大規模なロックダウンが行われました。これは、感染症対策や公衆衛生の歴史の中でも大きな事件です。なぜこれが可能になったのでしょうか。またロックダウンしたにもかかわらず抑制に失敗したケースや、ロックダウンではなく自粛という社会的「強制」がすすんだ日本のケースもありました。これを歴史的にどのように考えることができるのか、皆さんとともに考えてみたいと思います。

12月5日 ㊏ 14:00-16:00

詫摩佳代 東京都立大学法学政治学研究科教授

「**国際保健協力と国際政治**」

新型コロナを巡ってはWHO（世界保健機関）を舞台として、米中の対立が激化しています。保健協力の歴史を振り返ってみると、実は似たようなことは度々起きてきました。国際保健協力はどのように国際政治と関わり合ってきたのか、なぜそもそも国際政治と関わり合うのか、考えてみたいと思います。

ファシリテーター　**宝月理恵**
東京女子医科大学看護専門学校・佛教大学　非常勤講師

本セミナーは、公益財団法人日立財団 2019年度（第51回）倉田奨励金人文・社会科学研究部門に採択された研究「医学史と社会の対話――メディカル・ヒューマニティーズの社会への研究成果還元およびアウトリーチ活動の展開」の一環として行うものです。本研究では、日本における医学史を中心としたメディカル・ヒューマニティーズの発展をめざし、研究成果の発信、ならびに幅広い関連領域の研究者との知的循環の場をつくりだすことを目標としています。